様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：３１３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１４３９１

研究課題名（和文）新しいタイプの抑うつ症候群の重症度評価尺度の開発

研究課題名（英文）Development of severity rating scale for new-type depressive syndromes

研究代表者
山川　樹（Yamakawa, Itsuki）

東北文化学園大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：７０８１７６５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：新しいタイプの抑うつ症候群（新抑うつ）について発症モデルを構築し、重症度を測定するための尺度を開発した。（１）まず発症モデルの構築について既出の発症機序に関する仮説枠組みをもとに発症理論を構築した。（２）次に新抑うつの重症度を測定する尺度項目を選定し会社員を対象としたWEB調査を通じて勤務時間内外別ストレス状態尺度（the Distress Scale for On and Off Duty; DSOOD）を開発した。（３）そしてDSOODの妥当性を検討する目的で新卒社員の職場適応を検討する2年間のパネル調査とWEB面接調査を実施した。（４）最後に、臨床群からDSOODのデータを取得した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は，新抑うつについて心理学の観点から発症モデルを理論化し，その重症度を測定するための尺度（DSOOD）を開発したことである。これまでは従来主流であった抑うつを想定して開発された尺度を使用するしかなかったが，新抑うつに合わせて作成したDSOODの登場により，社会の変化に伴う抑うつ像の変化に対応したより精緻な研究を行えるようになった。また，DSOODは従来の尺度では知りえなかった勤務時と勤務時間外のギャップを捉えられることができるため，社会人の適応状態についてより適切に把握し対応することが可能になるという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：We constructed model for new-type depression and developed scale to measure its severity. (1) First, a theory of pathogenesis was developed based on a hypothetical framework for the pathogenesis of depression. (2) Next, we selected scale items to measure the severity of new-type depression and developed the Distress Scale for On and Off Duty (DSOOD) through a online survey of company employees. (3) Then, a two-year panel survey and a online interview were conducted to examine the workplace adjustment of newly graduated employees in order to examine the validity of the DSOOD. (4) Finally, DSOOD data were obtained from the clinical group.

研究分野：臨床心理学

キーワード：抑うつ　社会系心理学　心理的障害　新型うつ　ストレス　尺度開発　職場適応

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

新しいタイプの抑うつ症候群の重症度を測定する尺度開発の必要性

2000 年以降、新しいタイプの抑うつ症候群（以降、新抑うつと略記）の増加が注目され、「新型うつ」というラベルが与えられて耳目を集めている。新抑うつには従来のうつ病患者を想定した対応が通用しないケースが多いことから特に産業現場は苦慮している。ところが、新抑うつに関するコンセンサスのある学術的定義は存在せず、重症度を測定する尺度も存在しないことがネックとなり、新抑うつの実証的な研究はほとんどなされてこなかった。

（１）過去の知見　　抑うつは質の異なる病態を含むこと（Monroe & Anderson, 2015）や、うつ病の出現には社会･文化的な要因が関係していること（Kleinman, 2004）は以前から指摘されており、世界的には常識となっている。そして新抑うつも、今日の日本の社会情勢の変化に応じて出現してきた可能性がある（樽味・神庭, 2005）。ところが、日本においては、文化的/学術的背景から、うつ病＝メランコリー親和型うつ病という固定観念が、一般大衆のみならず専門家にも強くもたれている傾向がある（清水, 2012）。その結果として、これまで新抑うつは、コンセンサスのある学術的定義についての議論や、重症度を測定する尺度開発に遅れが生じており、新抑うつの実証的な研究はほとんどなされてこなかった。ようやく一昨年、Kato et al. (2016) が新抑うつについて現代抑うつ症候群という概念を提起、操作的診断基準を提案し、精神医学的に十分練られた基準が提起されたことにより、新抑うつに関する研究の進展が期待されるようになった。

（２）課題と問題点　診断基準の提案をもってしても、解決できない点が少なくとも３つある。①診断基準は多くの場合、精神科を受診した人に診断を下すために適用されるため、未受診者の状態を量的に(つまり、症状の強さとして)把握することが困難である。②未受診レベルの状況を量的に把握することが困難なため、集団全体の傾向を把握し、疾患の発生を防ぐ一次予防が困難である。③また、量的指標がないため、症状が出ている人を見つけ出し、専門家への援助要請を勧める二次予防も困難である。産業現場では、新抑うつが休職問題に発展していること考えると、予防こそが重要であり、②③は大きな課題である。

（３）本研究課題における「問い」　上記問題点を解決するためには、新抑うつの重症度概念を確立すると共に、重症度を測定するための自記式尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討することが重要な課題となる。なぜならば、近年軽症のうつ病患者が増加しており、特に新抑うつでは軽症の患者が多いという指摘（斉藤, 2011）や、治療よりも予防を重視する流れが医学全体に広がっているためである。さらに歴史的には、自記式抑うつ尺度（e.g., BDI；SDS）の開発が抑うつの実証的研究を盛んにした経緯もある。新抑うつの登場は、日本に限ったものではない（Kato et al., 2011）ため、新抑うつの重症度を測定する信頼性･妥当性のある尺度が開発されれば、世界的な広がりを見せる新抑うつ問題の解決にも寄与すると考えられる。

２．研究の目的

目的１：新抑うつの概念定義及び発症モデルを理論化し、尺度項目を考案する
目的２：3 年間の長期縦断調査を通じ、尺度の予測的妥当性を検討する
目的３：臨床群を対象に面接調査を行い基準関連妥当性の検討と短縮版の作成をする
目的４：開発した尺度を産業現場で利用し、早期対応につなげる

３．研究の方法

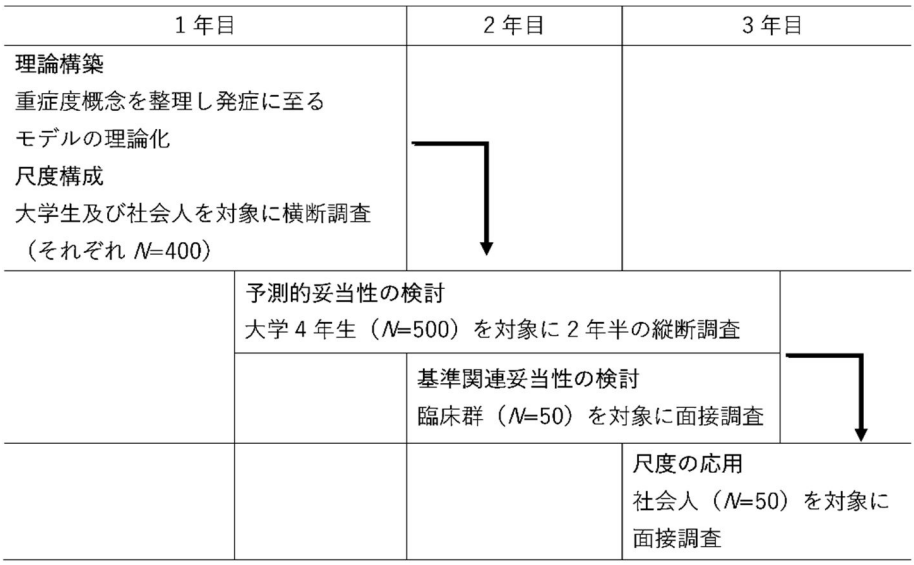

図１．本研究のスケジュール

（1）　理論構築

既出の発症モデル（坂本他，2014）をもとに、近年の当該分野における研究の進展も踏まえて対人過敏・自己優先抑うつを概念化し，発症モデルの理論を構築した（坂本・山川，2020）。この理論では Carver & Scheier (1981)の自己調整理論を参照しつつ，対人過敏傾向(Interpersonal Sensitivity; 以下 IS とする)および自己優先志向(Privileged Self; 以下 PS とする)という認知行動的特徴(村中他,2017)の双方が高い個人が，ネガティブな対人イベントに遭遇するとネガティブ感情を経験すると想定している。加えてこの理論は IS と PS の高低の組み合わせによって，新抑うつ（対人過敏自己優先抑うつ）だけでなく，従来の抑うつ（メランコリー親和型抑うつ）の発症も説明できるという特徴がある。

（1）　重症度を測定する尺度の開発

坂本・山川(2020)の理論に基づき，新タイプ抑うつに詳しい研究者と合議を行い尺度項目の考案を行った。そして，22 歳から 59 歳の一般会社員男女 400 名を対象に尺度項目の選定を目的としたオンライン調査を実施した(Sakamoto, Nakajima, Yamakawa, Muranaka, & Matsuura, 2021)。

（2）　DSOOD の妥当性の検討

オンライン調査会社に登録をしており，内定が決まっている大学 4 年生男女 802 名を対象に 2 年半の間，計 6 回の縦断調査を実施した。Time1 は 2020 年 3 月頃，Time2(*n*=354)は就職直後の 2020 年 5 月頃，Time3(*n*=255)はその約 1 か月後にあたる 2020 年 6 月頃，Time4(*n*=196)はさらにその 1 か月後の 2020 年 7 月頃に実施した。その後，Time5(*n*=114)は入社 1 年後にあたる 2021 年 4 月頃に実施し，Time6(*n*=133)は入社から約 2 年が経過した 2022 年 3 月頃に実施した（データ分析中)。

加えて上記縦断調査(Time5)の参加者を対象に WEB インタビュー調査も実施した。この調査では，インタビュー調査への参加依頼に応諾した者の中から，IS と PS が高く DSOOD で不調を示していること，もしくは IS と PS が高いにも関わらず DSOOD で不調を示していないことを条件に参加者を選定した。これは縦断調査で得られた量的な結果について，実際の認知行動的特徴と職場環境が新抑うつの発症に影響しているかどうか，すなわち理論や尺度の妥当性を質的に検討する目的で行った。最終的に条件に一致する 5 名に対してそれぞれ約 1 時間の個別 WEB インタビューを実施した（データ整理中)。

最後に精神科医と協同し、臨床群を対象に DSOOD を実施した。新抑うつの場合、医学的定義が未整備であるため、開発した尺度が実際に新抑うつの重症度を測定しているのか、すなわち外的基準に照らし合わせた妥当性（i.e.，基準関連妥当性）の検討が最も重要かつ難しい検討点となる。そこで、新抑うつの治療と研究を行っている精神科医が診療している臨床群のデータを取ることによって基準関連妥当性を確認する。最終的に 74 例のデータを得ることができたので，現在は医師の診断等と併せて分析用にデータを整理している。

４．研究成果

DSOOD の開発

因子分析の結果 2 因子が抽出され，不調さを表す 20 項目と快調さを表す 12 項目の計 32 項目が選定された(Table 1)。DSOOD の最大の特徴は，各項目について勤務時間中と勤務から離れたプライベートな時間を分けて尋ねる点にある。因子分析の結果，勤務時間中も勤務時間内も 2 因子構造が示唆され，同じ項目が選定された。そして，既存の抑うつ尺度(PHQ-9)や不安尺度(GAD-7)との相関係数を検討したところ，不調得点は勤務時間中，勤務時間外それぞれ有意な正の相関を示し，快調得点は勤務時間中，勤務時間外それぞれ有意な負の相関を示した(Table 2)。

Table 1 DSOOD の因子分析の結果(Sakamoto et al.,2021 より)

No.	Items	Working hours *M*	Working hours *SD*	Free time *M*	Free time *SD*	Working hours F1	Working hours F2	Free time F1	Free time F2
1	Have you ever thought that even if you do your best, nothing will improve?	2.67	1.29	2.36	1.17	.61	-.20	.62	-.20
2	Have you ever been restless and frustrated, or have you been impatient and uncomfortable?	2.41	1.22	2.07	1.11	.81	.06	.82	.01
3	Have you ever been depressed and never felt better?	2.41	1.27	2.16	1.14	.84	-.06	.80	-.08
4	Have you ever felt tired after completing the smallest task?	2.61	1.25	2.27	1.18	.79	-.04	.78	.01
5	Have you ever felt that you were worthless to the people around you?	2.06	1.32	1.79	1.13	.80	-.02	.79	-.02
6	Have you ever thought of yourself as a worthless person?	2.06	1.33	1.90	1.24	.75	-.05	.76	-.09
7	Have you ever been reluctant to do anything?	2.48	1.31	2.22	1.17	.80	-.11	.74	-.13
8	Have you ever felt happy?	2.20	1.08	2.82	1.13	.08	.80	.04	.75
9	Have you worried about something that did not matter to you?	2.30	1.21	1.93	1.01	.66	-.01	.66	.03
10	Have you ever been nervous or upset about something that you were interested in?	2.34	1.17	2.08	1.06	.78	.09	.79	.08
11	Have you ever become irritable?	2.66	1.26	2.31	1.14	.80	-.03	.82	-.01
12	Have you ever wanted to express your anger towards someone?	2.23	1.29	2.00	1.16	.73	.03	.71	.02
13	Have you had a fulfilling day?	2.42	1.11	2.88	1.11	-.01	.74	.05	.77
14	Have you not wanted to interact with strangers?	2.66	1.40	2.58	1.35	.51	-.10	.45	-.00
15	Have you been afraid that you make people around you feel uncomfortable?	2.11	1.08	1.90	1.00	.78	.13	.79	.11
16	Have you felt worried about what people around think about you?	2.20	1.18	1.97	1.07	.78	.14	.78	.14
17	Have you ever had difficulty focusing on something?	2.13	1.17	1.94	1.07	.78	.08	.82	.07
18	Have you ever felt like you were the only one left behind?	2.12	1.29	1.88	1.14	.78	.03	.82	.03

Table 2　DSOOD とその他の尺度の記述統計量(Sakamoto et al.,2021 より)

	Distress (free time)	Good condition (working hours)	Good condition (free time)	PHQ9	GAD7	*M*	*SD*
Distress (working hours)	.85**	-.48**	-.35**	.77**	.74**	46.6	18.9
Distress (free time)		-.35**	-.49**	.79**	.76**	41.4	17.2
Good condition (working hours)			.74**	-.44**	-.35**	26.6	10.4
Good condition (free time)				-.44**	-.37**	31.8	10.9
PHQ9					.88**	5.8	6.5
GAD7						3.8	5.0

また，不調さ得点の場合，勤務時と勤務時間外は r=.85 の相関を示し，快調さ得点の場合は勤務時と勤務時間外の相関係数は r=.74 であった。一方で散布図を検討した結果(Figure 1，2)，勤務時は不調が強いが勤務時間外の不調は低い人や，勤務時の快調は低いが勤務時間外の快調は高い人がいることが確認された。この結果から，DSOOD は勤務時間中は抑うつ症状を訴えるが勤務から離れた週末などは症状が軽くなるという新タイプ抑うつの特徴を捉えられることが確認された。

縦断調査については，大学 4 年次（Time1）で測定した IS・PS 傾向と職場適応の状態（DSOOD

得点）との関連を検討する予定である。また，面接調査の結果からは，DSOOD で高い不調状態を表す得点を示した人は，実際にその調査時期に不調を来していることが確認された。加えて，新卒社員が職場で適応するには，就職活動時に企業研究を十分行うなどしてリアリティショックが少ないこと，あるいはリアリティショックがあってもそれに対処し自分の仕事に意義を見出すことが関係することが示唆された。

臨床群のデータについては医師の診断と DSOOD 得点との関連を検討する予定である。

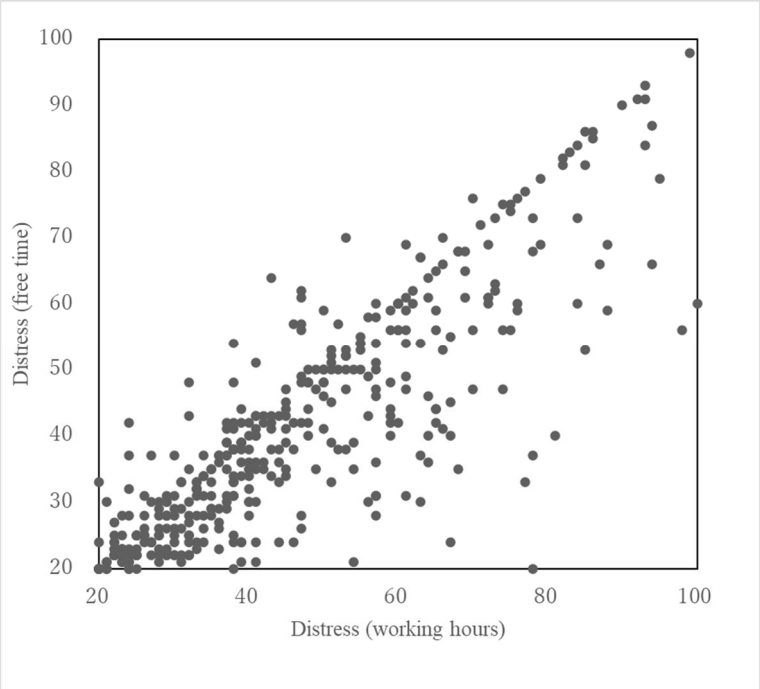

Figure 1　不調得点に関する，勤務時と勤務時間外の散布図

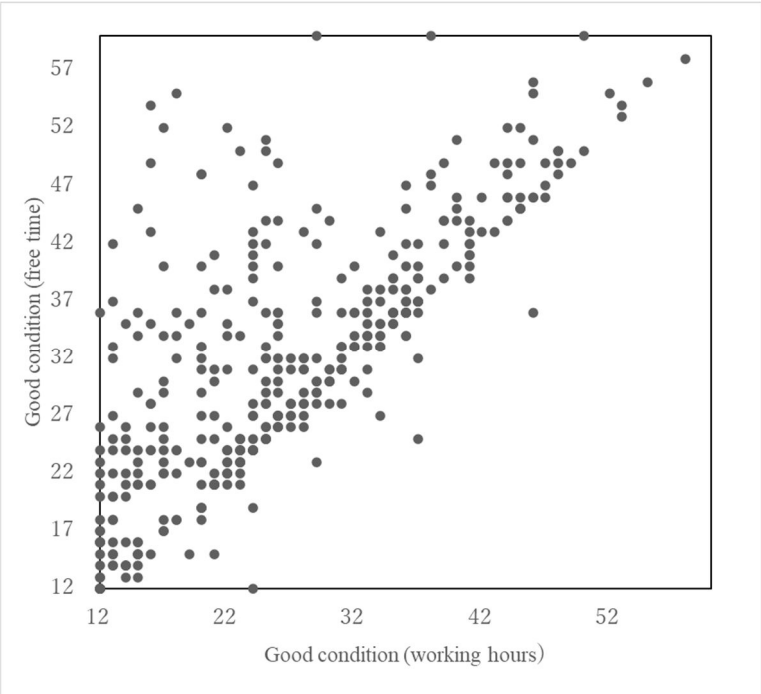

Figure 2　快調得点に関する，勤務時と勤務時間外の散布図

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 坂本真士・山川樹	４．巻 99
２．論文標題 対人過敏・自己優先型抑うつの提唱―「新型うつ」の心理学理論―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 109-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shinji Sakamoto, Miho Nakajima, Itsuki Yamakawa, Masaki Muranaka, Takanobu Matsuura	４．巻 12
２．論文標題 Developing a Scale for the New-Type Depression: Focusing on the Differences between Working Hours and Free Time	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Psychology	６．最初と最後の頁 1384-1396
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4236/psych.2021.129087	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 坂本真士・山川樹
２．発表標題 公募シンポジウム86 新しいタイプの抑うつ症候群への心理学アプローチ―「新型うつ」とは何だったのか―
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関